

第84回

特別支援教育実践研究センターセミナー報告

日時 平成24年12月15日(土) 午後5時～7時
 講師 松岡勝彦先生 (山口大学教育学部准教授)
 演題 特別支援教育のための行動コンサルテーションのあり方

1. 応用行動分析の基礎

ABC分析とは子どもたちの行動を客観的に理解し、その上で具体的な支援方法を考え出すために使用される分析方法である。行動を分析する際、先行条件 (Antecedent Conditions) - 行動 (Behavior) - 後続条件 (Consequent Conditions) からなる枠組みを用いて分析し、子どもに有効な支援方法を考える。

また、ある行動の出現頻度が高まる現象を強化と呼ぶが、内容によって2種類に分けられる。それは、好子出現の強化 (正の強化) と嫌子消失の強化 (負の強化) である。

好子出現の強化とは、ある行動を行うことで報酬が得られることで、その行動の出現頻度が高くなるというものである。例えば、子どもが駄々をこねるとソーセージが買ってもらえるという状況では、「ソーセージが得られる (後続条件)」ことで「駄々をこねる (行動)」ことが強化されるということになる。

一方、嫌子出現の強化とは、ある行動を行うことによって、自分にとって嫌な事物がなくなることで、その行動のが起きやすくなるというものである。例えば、「やめなさい」という指示に対してすぐに「いやだー」と言って子どもが指示を聞かない場合には、「『いやだ』と言う (行動)」ことで「『やめなさい』という指示が取り下げられる (後続条件)」ことが強化につながっている。

これらの事例への対応として、一つは代替行動を定着させる方法が挙げられる。先述した事例に置き換えると、「お手伝いをしてポイントをためる」という新たな行動によって、ソーセージを得られるようにする、もしくは「やめなさい」という強い口調の指示を「次はこうしようね」という柔らかい口調の指示に替えるなどが考えられる。

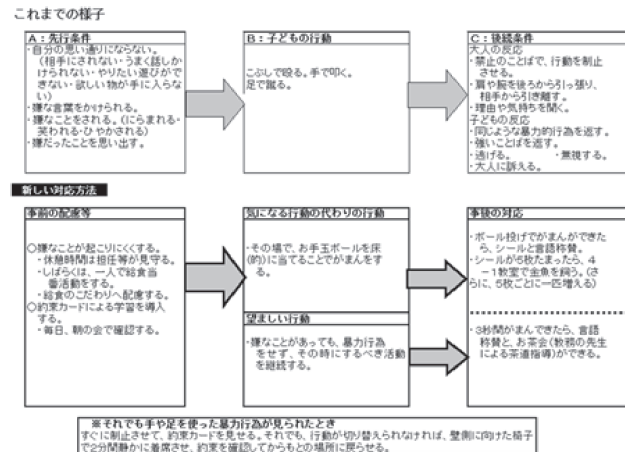


図1 ABC分析の一例

2. 行動コンサルテーション研究の事例

行動コンサルテーションとは、行動理論を背景に持つ問題解決指向のコンサルテーションであり、問題の同定、問題の分析、介入の実施、介入の評価という4段階を通して実施される。指導をするものをコンサルタントとし、コーディネーターや心理学の専門家などが行う。指導を受けるものをコンサルティといい、担任の場合と親の場合がある。クライアントは子どもである。

例えば通常学級在籍児の暴力行動減少のためのコンサルテーションでは、機能的アセスメントに基づく代替行動分化強化法等による指導を行った。ABC分析の結果と新しい対応方法の概念図を図1に示す。この事例では、クライアント(子ども)への効果として、問題行動の減少の他に、友人と遊べるようになるなどが見られ、その他にもコンサルティ(教員)がABC分析を継続し校内研修会で照会するなどの影響も見られた。

その他、食事の離席減少を目指した事例では、座って食べることを約束し(先行条件)と、それが達成できたときにパソコンでゲームをする(後続条件)ことをカードで示した(図2)。また、指示をする際に、前向きな表現をすることも重要である。例えば、「廊下を走らない」を「廊下を歩こう」と言い換えるなど、「～しない」ではなく「～しよう」という表現を用いることが望ましい。また、先行条件における援助(ヒント)としてプロンプトカードを用いることも有効である。咀嚼のさいに音を立てて食べる児童の例では、図3のようなカードを用いることで、どのような行動が理想的なのかをわかりやすく伝えられた。

行動コンサルテーションを行う際に、ABC分析や対応方法が適切であったかの評価に時間を費やすことができない場合も多い。その際に、教員・保護者などコンサルティに当たる者が相談内容を整理し、誰のどのような行動が問題なのか、それをどのような行動に替えたいのか、などを考えておくことも必要である。

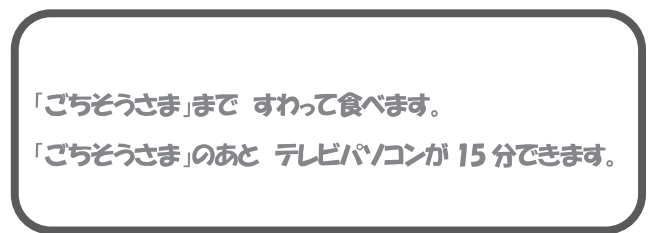


図2 教材例1



図3 教材例2